

Title	ツーウェイ・イマージョンでの協同学習の研究：聖学院アトランタ国際学校の取り組み
Author(s)	東, 仁美
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 2-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4975
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ツーウェイ・イマージョンでの協同学習の研究 —— 聖学院アトランタ国際学校の取り組み ——

東 仁美

2013年9月8日～12日に聖学院アトランタ国際学校のツーウェイ・イマージョン・プログラム（双方向のイマージョン）を視察した。2度目の視察となる今回は、日本の小学校から転入してきた児童がどのようなピア・サポート（クラスメートからの言語的な支援）を受けながら、英語での教室環境に慣れていくかを研究課題として授業観察をおこなった。

1. 学校概要

聖学院アトランタ国際学校（Seigakuin Atlanta International School, 以下セインツと略す）は、1990年開校の文部科学省海外子女教育施設認定校であり、幼稚部31名、小学部69名（2013年8月現在）が在籍している。2004年度より、ツーウェイ・イマージョン教育を導入しており、幼稚園年少クラスから小学校6年までの9年間、イマージョン教育を通して、日本語と英語の二つの言語、そして日本とアメリカの二つの文化をバランスよく習得できる子どもたちを育てている。

2. ツーウェイ・イマージョン教育

セインツには、日本語を母語とする児童と英語を母語とする児童が共存している。ツーウェイ・イマージョンでは、この二つのグループの児童が二つの言語の中に浸され、二言語を習得していく。文部科学省の学習指導要領に沿ったカリキュラムに基づき、児童は、国語（日本語）の授業を日本人教師から日本語で学び、英語の授業はアメリカ人教師から英語で学び、算数・理科・社会などその他の教科はそれぞれの教師からそれぞれの言語で学んでいる。

セインツの園児・児童の母語の比率は、日本語家庭の児童が約50%、バイリンガル家庭の児童（家庭で日本語と英語を話す児童）が30-40%、非日本語家庭（日本語を話さないアメリカ人の児童、英

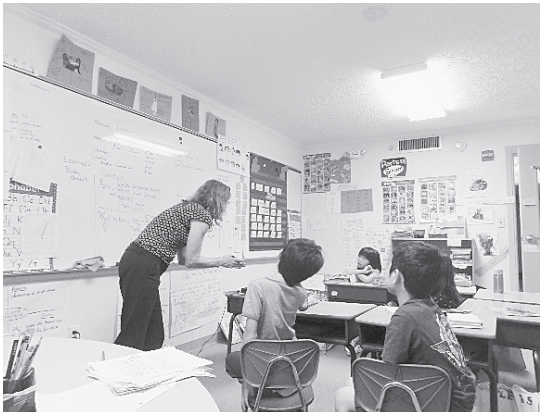
語以外の第三言語を話す児童）が10-20%である。創立当初は、アメリカ短期滞在者の子女が大半を占めていたが、現在のセインツでは、在籍者の半数以上が日本語を流暢に話し、半数以上が英語を流暢に話しており、ツーウェイ・イマージョン教育には理想的な環境である。キリスト教人格教育環境の中で、日本語での授業では日本語が母語の児童が英語が母語の児童を助け、英語での授業では逆の助け合いが自然になされている。（「保護者のためのツーウェイ・イマージョン教育ガイド」より）

3. 授業観察

今回の視察では、8月に転入した児童が在籍している3年生と6年生の授業を中心に見学した。その中のいくつかの授業について報告する。

(1) 6年生 英語

6年生は毎日2時間（1単位時間は40分）の英語の授業があるが、そのうち週3回は転入したばかりの児童（新入児童）を別の教室で指導するESLの授業（スムーズな英語環境への移行のための取り出し授業）になっている。残りの週2日は、新入児童も他の6年生と一緒にレギュラーの授業を受けていた。レギュラーの英語の授業では、6年生9名がコの字型に配置された机で授業を受けるが、児童同士の支援がうまく働くよう、バイリンガルの児童の隣に新入児童が座るように配慮されている。この授業では、新入児童には他の児童とは異なる課題が与えられ、教師は差別化指導（differentiated instruction）をしていた。自分の課題を済ませたバイリンガルの児童に教師が、“Can you help Kenta?”と新入児童の支援をするように促す場面が何度かあり、他の児童も自身の課題の合間に新入児童を支援をしていた。以下のように数名で関わり合っている場面もしばしば観察された。



B:(同義語を四択で探すハンドアウトをやっているAに対して)

slap って何だった？覚えてる？意味わかった？ジェームス、教えてあげて。

C:(英語でAに説明をしている)

D:日本語で言わなきゃわからないよ。

B:synonym だから…

新入児童のAは同級生の支援に対してほとんど聞いているだけであるが、次に紹介するESLの授業の中では発話も観察できたので、沈黙期というわけでもないようである。

ESLの授業には6年生のうち、3名(A, B, E)が参加していた。前出のBはセイントツに転入して10ヶ月、Eは転入後4ヶ月であるが、父親のアメリカ国内での転勤に伴う転校である。ESLの英語の授業はレベルに合わせたものであるため、Aもリラックスした様子で授業に参加していた。以下は、授業開始時に「週末どう過ごしたか」を聞かれたAに対しての支援である。

B:weekendがよかったか、楽しくなかったか。

E:わかるって。(このくらいの英語の質問であれば、Aは理解できる、という意味)

B:Good? Bad?

E:まあまあの方はso-soだよ。

別の場面で教師からWhat's your favorite sport?と聞かれたAに対して、

B:I like ～まで言ってみよう。describe って「説

明する」だから…

どっちかchooseするの。

日本語で説明をしようとしているが、synonym, weekend, chooseなどすぐに日本語に置き換えられない単語もあり、セイントツの児童独特の日英混在の文章が多いことも興味深い。

(2) 3年生 社会科

3年生は14名在籍しており、うち2名が8月に転入した新入児童である。この2名以外にESLのクラスで英語の授業を受けている児童が2名いる。社会科の授業では、新入児童とサポートできる児童とをペアで着席させ、教師が“Can you help your partner?”と何度も支援を促していた。この日の授業では、アメリカ合衆国の三権分立について勉強していた。教師が質問を繰り返しながら、三権分立の制度について説明をしていたが、その後、三権分立の制度を各自で1枚の紙にまとめる作業に入った。テキストの図や板書を確認した後、教師は“Don't be scared of being creative.”と自分なりのまとめをするよう、児童に働きかけていた。以下は、セイントツに1年1ヶ月在籍している児童Fが新入児童の支援をしている場面である。

「imaginationを使って書いて。えっと、imaginationってなんだっけ？ pictureは書くの。でも同じ絵じゃなくても大丈夫。このpaper(下書き用ルーズリーフ)がほしかったら、もらってもいいよ」

2年前(2011年10月)に視察した際、ESLのクラスに在籍していたFは、英語が理解できないためあまり授業に集中できない様子が観察されていた。1年間のツーウェイ・イマージョン教育で英語での授業をほぼ100%理解できるようになり、新入生の支援者として素晴らしいピア・サポートができるようになっていた。転入直後に受けたサポートを同じように新入児童に対しておこなっている姿は印象的であった。

4. 考察

一週間という短期間の滞在であり、限られた授業見学であったが、英語での授業を初めて受ける新入児童に対しての学校側の配慮、児童同士のピア・サポートを随所で観察することができた。アメリカなど英語が母語として話されている環境であれば、英語学習の経験がなくても、1年ほどで英語での教科学習についていけるようになる、というのが児童期の言語習得に対する通説である。しかしながら、現地校に転入した場合、全く英語が理解できない環境で、母語によるピア・サポートもない中、子どもながらも苦闘しつつ、自ら学習のストラテジーを構築していくことを要求される。また、現地校での授業が終わった後、週2~3回、日本語学校に通う児童にとっては、2つの学校から出される宿題に追われ、時間的な余裕もなく、ストレスの多い在外体験をする場合も多い。

セインツではこのようなストレスを最小限に減らす体制が取られ、献身的な教師陣によるキリスト教教育の中で、相互に助け、助けられながら、お互いに学び合い、成長することが幼児期から自然に実践されてきている。少人数、単学級での9年間の教育の中で、子どもたちはファミリーとして教室内でも協同学習をごく当たり前のように進めているのである。

バイリンガル教育の第一人者である中島和子 ブリティッシュ・コロンビア大学名誉教授は、ツーウェイ・イマージョンについて「子どもレベルの自然なインターアクションがおこなわれるので、これまでのイマージョン教育の問題を解消できる、とてもいいプログラムである」と高く評価している。(ぐんま国際アカデミーシンポジウムでの基調講演より)

CAL (Center for Applied Linguistics) のHPでは、アメリカ国内ではツーウェイ・イマージョンの学校が438校リストされているが、そのほとんどは英

語・スペイン語のプログラムであり、英日のツーウェイ・イマージョンは6校しかない。

(<http://www.cal.org/jsp/TWL/SchoolListings.jsp>)
その1つであるセインツのツーウェイ・イマージョン・プログラムは多くの研究者に注目を浴び始めているところだが、その実践に関しての実証研究はこれからの課題である。今回の視察では、母語によるピア・サポートを中心に観察をしてきたが、日本語話者の児童が英語を習得する上での、バイリンガル児童や英語母語話者の児童とのインターアクションの有効性についても研究を続けていきたい。また、今後も、このような法人内の国際学校での素晴らしい実践について発信する一役を担っていければ幸いである。



(ひがし・ひとみ 聖学院大学欧米文化学科准教授)